木曾栄作先生の人と業績

北村正司

(1)

木曾栄作先生は明治38年小樽の生まれである。父君は雑穀商で外国貿易も営む実業家であった。こうした家業と貿易港としての小樽の土地柄のせいか，先生は早くも少年の頃から，国際経済界に雄飛の大志を抱かれたのであった。中等学校は名門の庁立小樽商業学校を選び，英語の勉強には特に重点を置かれた。この学校の上学年で，小樽高商から出講の故浜林生之助先生の授業を受ける幸運に恵まれたので，先生の英語に対する好学心は，いっそう強まり，ついには浜林先生の門をたたいて，直接個人指導を受けるようになった。同時に小樽高商との縁が結ばれて行くのであった。大正11年に先生は小樽高商に入学した。元来先生は弁論に秀でておられたから，小樽高商では講演部に入部し華かな活動を開始された。当時講演部の顧問は，故苫米地英俊先生であった。木曾先生の一生に実に大きな影響を及ぼす苫米地先生との関係は，ゆくりなくもこうした邂逅によって始まったのである。苫米地先生は教場だけではなく部の活動を通じて，木曾先生の人物や実力を観察され，木曾先生の才幹を英語教育に活用する希望を心に秘めておられたようである。小樽高商の3カ年の歳月は早くも過ぎ，卒業期が迫って来た。木曾先生は実業界に入る希望であったので，学校側ではM銀行に推薦したいということになった。先生は身の振り方を苫米地先生に相談した。この時苫米地先生は，銀行もいいが，それよりむしろ英語教育界に入らないか，そして商業英語を研究したらどうかという強い示唆を与えられた。もともと英語が好きで，得意中の得意の木曾先生は，苫米地先生の好意に感激し，万事を託され

たのである。こうして実業界で国際的雄飛をしたいという先生の大志は，コースが修正され，実業界で英語を用いて国際的活動を行なう人材の育成へと転換したのであった。

まもなく木曾先生は苫米地先生のお世話で小樽市立高等女学校に奉職の話が決まり，ひとまず幹部候補生として，旭川の第７師団に入営された。10カ月の後除隊となり，いよいよ英語の先生として教鞭を取ることになった。これを契機として，苫米地先生との関係は，ますます密接になり，多年にわたって，学問と人生の両面において，測り知れぬほど広く深い影響を受けるようになるのであった。

いま試みに苫米地先生と木曾先生の筆蹟を比較すれば，人は日本字だけでなく英字においても，書体が極似しているのを知って一驚を喫するであろう。この事実は，木曾先生がどんなに己れを空しくして，苫米地先生のすべてを――学問も人生の行き方も――全人的に摂取しようと努力されたかを，雄弁に物語るものである。師を心から尊敬して，ひたむきに教えを仰ごうとする尊い心根がうかがわれる。また，同時にこの師弟の間の美しい関係が偲ばれるのである。

木曾先生は苫米地先生の口添えで，小樽市立高等女学校に在職中，きわめて研究時間に恵まれた生活を送ることができた。小樽高商の英語の先生方の講義に出席して，教師の立場から改めて英語と英語教授法の研究をすることも許された。また一方においては，苫米地先生から，英作文の個人指導を受けることができた。これは火の出るような激しい訓練であったらしく，英文家としての木曾先生の実力の基礎が養われたものと思われる。昭和５年には嘱託講師として小樽高商に勤務し，翌６年から専任として教壇に立たれた。おそらくこれは苫米地先生が懸案を実現されたものと考えられる。

木曾先生はこうした恩師の処遇に感銘し，切磋琢磨学界における地歩を固められたが，ついにあらゆる意味合いにおいて苫米地先生の後継者として，恩師や世人の期待に見事に応えられたのである。木曾先生は苫米地先生の学

恩を常に感謝しておられるが，昭和41年に苫米地先生が逝去されるまで，誠心誠意報恩を志し，万事に気を配って尽されたのは，知る人の心を強く打つものがあった。

さて，木曾先生は人情の厚い方である。親切を尽す機会を積極的に求められる。先生の交際の範囲は実に広いが，知人，友人などすべての人に対して何らかの形において，好意を示そうとされる。したがって利他の機会が訪れると，頼まれなくても，行動を起こし，すこしでも人の幸福に寄与されようとする。また先生は明るい性格を持たれ，その生活は，健全な笑いに包まれていることが多い。戦争中の暗い時代においても，明るく楽しい面を発見されるのであった。こうした健康な笑いに加えて座談が上手と来ているので，先生の加わっている会合はいつも賑やかである。また難しい問題も円滑に進むことが多い。

木曾先生は公私ともにきわめて多忙な方である。しかし先生に接していると，精神的余裕を十分に持っておられることに気がつく。これは先生が決断が早く，物事をテキパキと処理し，また事がうまく運ばない場合にも，無用に抱泥しないところに原因があるように思われる。先生はよく「どんなに心配事があっても，夜枕に頭をつけると，すぐ寝てしまう」と言われる。概して先生は，人生に処する方法を，人生そのものに学び取ろうとする傾向が強い。先生はその広い交際の中において，多くの人の言動を観察して，はっきり記憶されている。また人情の機微を心得ておられ，これを総合して，どんな問題が起きても，安定した態度で的確に処理される。

先生はまた包容力に富み，人の長所を決して見のがすことがない。人の助言やアイディアを進んで取り入れられる。その反面，事柄によっては，人の意見や常識的なやり方などに盲従することなく，独創的な方途を開拓されることもあり，また一度決定されたことでも，経過にとらわれず，良い方に変えられることもある。要するに，考え方が自由自在，柔軟，独創的で，これによってご自身の幸福も確保され，大学や関係団体や関係者の利益も図られ

ることが多かった。

先生はまた健康に恵まれ，すくなくとも成人してからは，病気らしい病気をされたことがない。最近でも，しばしば深更におよぶまで仕事をされるようである。また夜どんなに遅く就床しても，翌朝は予定の時間に眼が覚め，床を蹴って起き上がると言われている。実に頑健と言うべきである。しかし他面において，健康には細心の注意を払われている。書斎の棚に各種の新薬が並べられているし，また総合強壮剤や狭心症の緊急薬を，絶えず携行されている。人の嫌がる胃のバリウム検査なども，毎年再三進んで受けられるし，最近は健康の保持に一段と留意されているようである。元来頑健の上に，かような苦心をされておられるし，母堂も長命された家系であるから，先生の長寿は間違いないと信ぜられる。

先生はよく「万年青年」と言われる。年齢よりは驚くほど若く見え，また精力的である。これは，一つには健康であり，明るい性格を持たれているためであると思われるが，また一つには，先生が常に新しい仕事に意欲を持たれ，前進姿勢を保持されているからであろう。数年前のことであるが，小樽市で全道英語教育研究大会が開催された。この大会には英語教育の世界的権威であるミシガン大学の Fries 博士も講師として参加されたので，1,000 名近くの来会者があり，盛会をきわめた。この時 Fries 博士は挨拶の中で，会長の木曾先生のことに言及し，「このようなダイナミックな会長を持っている北海道の英語の先生方は幸福である」という意味のことを言われた。出席者一同は，外人も同じような観察をするものと，微笑をもって博士の言葉に応えたのであった。いろいろな名誉職を兼任される先生は，小樽，札幌はもちろんのこと，広く道内を駆けずりまわらなければならないことが多く，そのうえ個人的な世話も広汎にされるので，多忙をきわめておられるが，これに辟易せず，どこからそんな精力が生まれるかと首をかしげたくなるほど，精力的に活動をされる。また次から次へと新しい着想をもって仕事を進められる。しかもこうした生活が多年にわたって続いているのであるから，

誠に感嘆のほかはない。木曾先生に接する多くの人々が異口同音に言うように，実業家としても，先生は大成功を収めたに違いないと思われる。先生は今は小樽女子短期大学の学長に就任されているが，その経営には必ず成功されるものと確信される。

(2)

木曾先生が修業時代に，恩師の苫米地先生に全人的に傾倒されたことについては前述したが，先生の学風も，自然の成り行きとして，苫米地先生に極似し，結果的には，苫米地先生の残された，小樽高商の英語の伝統を見事に継承されたのである。木曾先生の研究の中には，常に実用性が意識されている。深い思索の中にも，実学の伝統を発見することができる。そうした研究の長年月が実を結び，木曾先生が商業英語の日本的権威として活躍され，今日に至ったのは，本学のためにも，誠に慶賀すべきことであると思われる。

商業英語と言っても，先生の研究範囲は広汎である。貿易通信文が中心となっていることは当然であるが，そのほか C. I. F. 契約，信用状など貿易実務に関する論文があり，さらに貿易金融を始めとして，貿易経営の全般に及び，また貿易政策，通信協定，国際カルテルを論ずるなど，先生のレパートリーは，後掲の著作と論文の目録が明示するように，すこぶる多彩である。

貿易経営に関する著書には，昭和24年発行の『貿易経営要論』がある。これは貿易経営を，経営学と商品学の立場から，解明を企てたもので，国際商品流通機構，貿易経営組織，海外市場分析，貿易取引約款，輸出貿易金融，商事危険分散の各問題についての詳述がある。昭和31年に改訂増補版が出て，いよいよ内容が充実した。

さて，商業英語に関する研究に関して，まず特記すべきは，昭和10年に発行の苫米地英俊先生著『国際貿易活法』に参画，輸出編の草稿を担当されたことである。この書物は，輸出編と輸入編の両編から成り，貿易取引の実際について，取引とこれに関する実務を細大もらさず挙げ，これに要する英

語通信文と書類等の書き方を示したもので，きわめて有益な書物である。木曾先生は輸出編に関し，苫米地先生に協力され，莫大な時間と努力を捧げられた。またこの仕事によって，木曾先生も一段と自信を増されるなど稗益するところが多かったように思われる。この後しばらくして先生の外国留学問題が起きて来た。当時は英国英語一辺倒の時代であったが，時代の推移を見通された苫米地先生の助言によって，アメリカの大学を選ぶことになった。そして昭和12年についにペンシルベニア大学の大学院に留学し，2年にわたって，business administration を広く研究された。大学院の修士論文は，*Japan's Recent Foreign Trade Policy* であった。昭和14年にアメリカでの研究を終え帰朝されると，先生の学界活動は，いよいよ活発さを加えた。昭和15年には12回にわたって，雑誌「商業英語」に『商業英語における語法研究』を発表された。

太平洋戦争が終わると，わが国の英語の研究はいよいよ盛んになり，商業英語の重要性も一段と高まるようになった。こうした情勢において，先生が商業英語に関する大著を刊行すべき機会が熟して来た。昭和28年に，ついに先生は三省堂から『商業英語活用辞典』(B 6 版 896 頁) を発刊された。この辞典はいわば先生のライフワークと言うべきものである。商業英語通信文における頻度数と重要度の最も高い70語を中心として，アルファベット順に配列し，これを含む語句を前置詞，冠詞，形容詞，動詞との関連に留意して与え，豊富な文例へと展開を試みた辞典であって，巻末には，和英活用索引，商用略語表，商業電報文が付加されており，ひじょうに便利な書物である。この辞典は先生のそれまでの商業英語に関する諸研究の集大成と言ってもよいもので，学問的権威も，実用的価値も共に高い辞典である。この辞典の刊行によって，先生のわが国商業英語学界における地位が一層高められた観がある。このことは小樽商大のためにも慶ばしいことであった。

先生はまた英文法の分野においても業績を挙げられている。昭和21年に刊行された『英語時制の研究』は，当時本道の英語研究者に高級英文法書と

して広く愛読された。また同じ年に発行された『米英語法便覧』は，米語と英語の語法の相異をアルファベット順に配列して，文例によって説明したもので，稗益するところが多かった。

また英文家として名の高い先生は，英作文の参考書や教材を数種出版されている。その主なるものは『基礎をつくる英作文』，『英語基本文型集』，『完成英作文演習』，『英作文必修基本文型集』などである。『完成英作文演習』は基本文型，文の組み立て，表現の方法，文の転換の4編から成り，文法の意識から出来るだけ脱却して，基本—展開—完成の3段階によって，英作文力の養成を企図したものである。先生の多年にわたる英作文教授の原理と方法が随所に見られ，異色ある好著との評判が高い。

次に，先生の社会的業績について，一二記してみたいと思う。先生は北海道の英語教育界にきわめて大きな業績を残されている。本道の英語教育界において，先生ほど長年にわたって，広く深い多様な貢献をして来た人は，他にないと思われる。その最も貴重なのは，先生の北海道英語教育研究会に関する活躍であろう。この研究会はもともと先生が昭和23年に同志と共に創立したもので，先生は最初は理事長に選ばれ，まもなく会長に就任され，今日に至っている。この間全道大会を17回も開催し，本道の特に中学・高校の英語教育に清新な刺激を与え，広汎な貢献をしている。先生は常に中央と密接な連絡を取り，Hornby や Fries など英語教育における世界的権威者や，日本の最高権威者を，続々大会に招聘した。これらの諸学者の講演や実演授業によって，本道に新しい英語教育の理論と技術が紹介され，英語教育に対する研究の情熱が喚起されたのである。この研究大会のほか，毎年全道高校英語コンテストも開催されているが，これらの会の立案と実施に関して，先生は独特の明るい円満な態度と謙虚な精神をもって，関係者に接し，万全の注意と柔軟な運営によって，山積する問題を打開されて来た。この研究会に関する活動に限っても，木曾先生の名は本道英語教育史に永遠に残るものと信ぜられる。

先生は特に英語教育の実用性を強調し，英語教育において，実用英語が占めるべき価値と役割について確固たる信念を持っておられる。この信念は小樽商大の英語教育にも反映するところが多く，その一例としては道内の他大学に率先して，語学ラボラトリー設置に関し先生が指導的役割を果されたことがある。また広く道民の英語の実用能力の向上に資することも，先生の念願とするところであるが，先年全国的な機関である実用英語検定協会が発足すると，先生は懇請に応じて，北海道支部長の重責を引き受け，爾来毎年2回検定試験実施のため，権威ある検定試験委員団の組織を始め，会場の選定依頼など，献身的に世話をされている。この試験は受験者が多く，今後も永久的に行なわれ，各種の段階の英語研究者に健全な刺激を与えて行くものと思われる。この分野においても先生の貢献は大きく，また今後も長く貴重な寄与を重ねられることであろう。北海道英語教育研究会と実用英語検定協会に関する用務だけでも，大変な量であり重責であるが，先生はそのほかに多岐多端な社会的活動をされているのであるから，その超人的精力には感嘆のほかはない。

先生は小樽高商，小樽経専，小樽商大と，緑丘学園に専任として36年間在職された。この間において，先生は深い学識と明朗な人格をもって，幾多の人材の董陶に尽された。また英語科の中心として，本学英語教育の進展に尽された功績も大である。また前述のような著述や社会的活動によって，本学の声価に寄与されたことも，長く記憶されるべきである。

先生は小樽市民の多くにとって，小樽商大を象徴する教授の一人であって，各階層の人々に親まれ，敬愛されて来た。小樽商大と言えば木曾先生を連想する人々も少なくない。したがって，先生が今春本学教授の職を辞せられたのは，学内だけでなく，一般市民にとっても物淋しいことであった。しかし，幸い先生が引続き当市に居住され，新設小樽女子短期大学の学長に就任されたのは，先生のために慶祝にたえず，また先生を知る人々の大きな喜びであると思われる。この短大は現在は英文科だけから成っているが，その

発展のため，先生は初代学長として，もう縦横に活躍されている。小樽女子短大は，先生の構想によって，最新式の語学ラボラトリーや多数のタイプライターを備えるなど，近代的な特色を示している。先生の学風から見ても，おそらくこの短大には，いわゆる教養英語のほかに実用英語を大いに尊重する気風が生ずるに違いないと思われる。先生が郷土小樽のために，また広くは全道のため，この短大を理想的な学園に育成されるものと期待される。先生のご壮健とご発展ご多幸を祈ってやまないものである。